

人の名譽財寶學識を羨望するものはない。そして彼等程、自分の生活を省みないものは有りません。彼等と雖もキリストのやうに野に鳥を見ることが出来やうし、釋尊のやうに蓮の花を眺めることが出来るのであります。けれど彼等は可見の世界より不可見の世界へ入るべき心靈の窓を開くことを忘れてゐるのです。「一粒の櫛の實には、鬱蒼たる森林がかくされてある」と聖徒は告げる。「吾等の戀愛はかの一瞥によつて始つた」と戀人は語る。一の内に永遠が抱かれ、永遠が一の内に顯現することは、大靈の法則であります。けれど凡人は之れを單なる裝飾に過ぎないことと思つてゐる。そしてそれを人々の生活に何等の影響をも與へないやうに思つてゐます。けれど偉人は語ります、「人々は先づ

變化せしめやうとするよりも、識得しやうとする方が、一層大切である。蓋し識得せらるるや直ちに自づから變化せしめられるから」と。斯うして偉人や聖徒達は私達と同じものを見、同じものを聞きながら、その個々の奥に遠く開けた一路を仰ぎ見ます。彼等は戸の外に世界のあることを知つてゐます、彼等はそこに人生に處する唯一の鍵を藏してゐる。私達は、彼等が死の床に就いて居りながら、しかも小兒のやうに微笑してゐるのを不可思議に思つてはなりません。たとへ彼等は私達と同じ部屋に居りましても、すでに私達の居ることを忘れて、無限と語つてゐるのです。私達も亦、單に苦痛を忘れやうとして努力しても甲斐がない、單に微笑まうとしても出来ないことである。けれど何よりも先き

に唯戸を開くことさへ識つてゐるならば、私達も亦自から微笑むにちがひない。そこには既に死がないからであります。此光りを孕んだ大なる現實に生きる生活こそ、充實せる生活と云ふべきであります。親鸞聖人の言葉を借りて云ふならば、之れが「自然法爾」の生活であります。

近代宗教思想講話終

大正五年十月二十日印刷
大正五年十月三十日發行

近代宗教思想講話奥附定價金壹圓



發行所

東京巢鴨町二ノ三
振替東京三ノ二五

無我山房

電話番町四二九

著者

清水俊榮

發行者

東京巢鴨町二ノ三五
原子輦

印刷者

東京巢鴨町二ノ三五
原子廣宣

印刷所

東京巢鴨町二ノ三五
アテネ印刷所
電話番町四二九

326
471

終